
バカと天才と召喚獣

天城 あいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才と召喚獣

【Nコード】

N8951L

【作者名】

天城 あいる

【あらすじ】

文月学園2年Fクラス - 彼はFクラスにも関わらず生徒内で『最強能力者 - チートスキル - 』と呼ばれていた。学園内で恐れられ、あるいは尊敬され、あるいは慕われる。そんな彼が繰り広げる馬鹿達との日常

プロローグ

俺の名前は高城岬・タカギミサキ。今日、文月学園の二年に進級する。

桜が咲いている文月学園への道を通り、空を見上げると新しい日々が始まりを祝うように、青々としていた。

俺はポケットに手をつ突っ込んだまま、視線を前に戻す。すると後ろに見知った気配を感じた。

どんっ

軽い音を立てて俺の背中を目掛けて何かが当たる。

「…岬。何で先に行っちゃうの」

艶やかな黒髪を春の風に翻された幼なじみがそこにいる。

「よう。翔子」

「……どうして先に行ったの」

「あー……」

ただ理由も無いのだが、それをいうとコイツは怒りそうだ。今ももうひとりの幼なじみを握りつぶさん限りに手のひらに力をこめているではないか。

「し、翔子！！！！いい加減に俺の頭を離せ！！」

「……雄二は黙ってて。これは2人の問題」

「それは分かってるから岬と充分話し合えばいい！！俺が言ってる

のはその事じゃない！！！！」

「……」

「無視かよ！？」

「そろそろ雄二を離してやったらどうだ？」

「……じゃあ、これについて説明して」

「岬の言うことなら聞くのかクソ！」

雄二の言葉を華麗にシカトし、翔子がカバンからとりだしたのは一冊の本のようだった

『高城岬×坂本雄二』

『天才とバカと薔薇の園』

『高城岬総攻め本』

等々。

がたくさん翔子の手握られていた

「な、なんだこれええ！？！？どういう事だよ岬！？」

「知るかよ！！気持ち悪っ！！俺は至ってノーマルだっつのありえねえー！！！！」

「俺だつてノーマルだ！！」

そのまま俺たちはその本を茂みに投げ棄てた。

おーこわ。気持ち悪っ

雄二とかありえねえし。

「……この本が出ると言うことは2人が怪しいと言うこと」

「ありえねえ！！」

「……息もぴつたり」

翔子は少しふて腐れた顔をして横を向いた。

雄二と俺は鳥肌が立ったのを抑えきれない。誰だよこんな出版したやつ……！！

翔子はそれから少しすると機嫌が治り、文月学園が見えてきた校門の前には鉄人が立っている

「おはようございます鉄人」

「……おはようございます」

「チーッス鉄人」

「鉄人と呼ぶのをいい加減止めないか？霧島は良いとして、高城に

坂本！」

「アハハ。」

「笑い事ではない！！」

…ふう、もうお前らには何を言っても無駄だな。」

鉄人から振り分け試験の結果の入った封筒を受けとる。翔子はチラリとそれを見るとまた封筒に紙を戻した

「霧島はAクラスか。当たり前だな

そして高城。」

「はい？」

「俺はお前はやらなくても出来る奴だと思っていた」

「ああ、はい。まあ」

適当にそう返し、やっと封筒の上を切り終えた

「その考えを改めなければならぬようだな

お前は……………

正真正銘の大馬鹿だ」

『高城岬 Fクラス』

もちろん雄二もFクラスだった

「……………どうして？」

「そりゃあFのが面白そうだからだろ。」

「……………先生。私もFクラスに」

「却下だ」

「……………。。」

手を上げ、鉄人にそう言うも直ぐ様却下された翔子。まあ翔子くらい頭が良かったらAクラスにいるべきだよな。
もしかしたら代表なんじゃないか？

「ま、頑張れよ翔子」

「高城…名前を書かずに提出したのはワザトか」

「そつすね！」

呆れたようにため息をはいた鉄人は、俺たちを早く校舎内に入るよう急かした。

だが、翔子は静かなまま、下を向いていた。

「翔子？」

「……Aクラスだと思ったのに」
「悪いな」

どうやら俺がAクラスでないのが不満らしい。その言葉に、苦笑いで返した

翔子の頭に手を置き、軽く撫でる

「なあ。そろそろ行かないか？」

「ああ。そうだな」

翔子の頭から手を退かし、雄二に着いていく。翔子は少しうつ向いてから雄二に向かっていった。

「……雄二、邪魔した」

「ぐああっ！！」

翔子のアイアンクローが、華麗に雄二にめり込んだ

主人公設定（前書き）

バカテス一巻を紛失したので原作が出せません…
とりあえず見つけるか買うか何とかしますので、その前にこちらを
アップしときます

主人公設定

主人公（名前）：タカギミサキ 高城岬

容姿：黒髪に赤茶色の目。

髪は少し長めで、肩につくくらいのを後ろで緩くくくっている。
眼鏡を授業中のみ装備。

備考：頭が良いことを鼻にかけず（ただ明久よりは良いと認識）、
明るいため、男女共にモテる。よく明久や雄二、秀吉と行動してい
るので、腐のつく女子たちに噂されることもしばしば。

二年Fクラスであるが、一年のころ学年一位という記録を持つ。霧
島翔子と坂本雄二とは家が隣同士の幼なじみ。

第一問：春に始まる馬鹿物語

「……ねえ」

「ん？なんだ？」

「……さつき岬が話していた、大化の改新っていつのこと？」

「三年生にもなつてそんなことも知らないのか？翔子は馬鹿だなあ。俺は知ってるぞ」

「……雄二には聞いてない、岬に聞いているの」

「ぐあああ！痛い！！頭が割れるように痛い！！」

「翔子。手を離してやれよ？」

「……分かった。」

「はあつはあつ…死ぬかと思つた…」

「はあ…。で、大化の改新だっけか？」

「『無事故の改新』だろ。」

「そうだそうだ。625年だぞ翔子」

「……だから雄二には聞いてない」

「そうだよなつ！岬！！625年だよな！！」

「はあ？なにいつてんだよ645…ごふっ！！」

「625年だ翔子！！」

「……雄二、岬を殴った。殺す」

「待て待て待てえい！ほら！岬とデートでも行ってこい！忘れんناよ！625年だからな！」

「……デート、いこう」

「…ただの翔子への嫌がらせじゃないか…」

間違ったことを教えたのは翔子に勉強面で勝てない雄二の嫌がらせだった。

「教室まで送ってこうか？」

「……だめ。大丈夫」

「そうか？じゃあ行くな

雄二！いつまで寝っころがってんだ踏み潰すぞ」

「……ばいばい」

「ああ。じゃあな翔子」

校門で別れ、俺は雄二を引き摺ってFクラスに向かった。Aクラスも見てみたいが、後でいいや

Fクラスにつく直前。雄二が生き返った。

「ぐあああ！」

「なんだ雄二。寝言か」

「なわけあるか天然ボケやろう！！」

「天然だと！？」

「つつこむとこそそこかよ！」

肩で息をしながら叫ぶ雄二に、げんこつをお見舞いした

「うるせえ。目立つたる」

「ほはお前のせいだけだな。」

「は、意味わかんね」

二人で並んでFクラスに入ろうとしたとき、ドアに挟まった

「ちっ！どけよ雄二！」

「お前が後から入ればいいだろ岬！」

「俺のが偉いんだから俺に譲れ！」

「偉いだと！？」

ドアに挟まりながらケンカする俺たちはさぞ滑稽であろうが、この戦い、負けるわけにはいかない

「まあいいや。先はいれよ」

「おおサンキュー」

結局俺が体を退かした

なんだかめんどくさくなったからだ

「おはようじゃ。岬、雄二」

「おはよう秀吉」

「おす」

適当なちゃぶ台に陣取る。つかちゃぶ台とかまじかよ不衛生だな

「秀吉は早いな」

「早く目が覚めてしまったの。岬と雄二こそ早いではないか」

「俺もそんな感じだ」

「……眠くなっただから寝るわ。」

「いきなりじゃの……」

座布団を丸めて枕にする。そして寝っころがった

「「ダアーリーーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」
「!？」」

野太い声に体がびくりと反応した。なんだようっさいな

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

起き上がって回りを見渡すと、いまは自己紹介をやっていたらしかった

吉井が真っ青な顔をしながら席についた

「あ、次おれか」

「ええ。よろしくお願いします」

「えーと高城岬。よろしくな」

特に言うこともないしこれくらいでいいだろ

「え!?!なんで岬が!?!」

「うるっせえぞ蛆虫」

「それ君の幼なじみにも言われたよ!」

吉井は関わるとろくなことがない。吉井をシカトして席についた

「シカトされたっ!？」

それからしばらく自己紹介が続き、前の席の吉井をいじるのにも飽きたころ、教室のドアがあいた。

「あの、遅れて、すみま、せん……」

お？姫路じゃないか
なぜにこんな辺境の地に（Fクラス）

ねっころがったまま、周りの奴が姫路に質問したのを聞く。ふーん
…体調が悪かったのか
姫路は吉井の近くに來たため、起き上がった。
だってあのままねっころがってたらパンツ見えんだろ。さすがに
まずいだろ

「き、緊張しましたあ……」

吉井が何かしらを思ってたか、ちょっとニヤニヤし出したのを予感し、

「あのさ、姫」

「よう姫路。Fクラスで会うとは思ってなかったぜ」

とりあえず被せてしゃべってみた。吉井は驚愕してから俺に目を向け睨み付けてきたので、逆に満面の笑みを出してみる。
逸らしやがった。

「あ、岬くん……？」

え、ど、どうして岬くんが……！？」

「おもしろそーだったから！」

「そうなんですか……よろしく願いしますね」

ほわんとした笑顔が印象的です。さすが美少女。

……なに！？寒気が……

「俺は坂本。坂本雄二だ
よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願いします」

深々と礼をする姫路。育ちの良さが滲み出るってやつか。

雄二が姫路の体調を聞いたとき、すかさず吉井が入ってきた。
吉井を見て驚く姫路。

「姫路。吉井／明久がバイクで悪い／すまん」

雄二とハモった。さすがは幼なじみといったところか。吉井をいじることに関しては容赦しないからな

慌てて姫路がフォローすると、吉井に興味があるやつのことを思い出した

「そういえば、たしか久保がお前に興味があるっていつてたな」

「久保さん？」

「ああ。俺も聞いたぞ。確か……久保」

「利光だったか」

「……………」

おいおい。泣くなよ
うざいぞ吉井

「半分冗談だ」

「半分!？」

吉井がでかい声を上げたせいで先生に注意され、パンパンと教卓を叩いた先生が教卓を壊し

…ここまでボロいとはな

先生は替えの教卓を用意するために教室を出ていった

それに続き、吉井と雄二が教室を出ていく。だいたいの予想がついているので、雄二に念のため後で教えてくれるようお願い、俺はまた眠りについたのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951/>

バカと天才と召喚獣

2011年1月15日22時08分発行